

はじめに

これまで満蒙開拓について多くのメディアが折りに触れて取り上げてきた。ところがその多くは避難途上の悲劇や残留孤児などの問題で、いったん避難した大都市での実態について触れることはほとんどなかった。

私が大都市での出来事に関心を持つようになったのは、出身地である長野県北部の北山部7か村が送出母体となった黒姫郷開拓団についての調査がきっかけだった。黒姫郷は48戸166人の小さな開拓団であったが、ソ連軍侵攻による避難の途上で2人の乳幼児を失っただけで最大都市の奉天（瀋陽）までたどり着いた。しかし、そこで冬を越して帰国するまでに104人が亡くなっていることがわかった。

大都市での死者が多いことを疑問に思い、さらに調べを進めると戦後厚生省援護局が発行した資料に行き当たった。そこには、旧満洲地域（満洲国及び関東州）の犠牲者は約24万5000人、うちソ連軍侵攻時の犠牲者が約6万人と記されていた。つまり、8月9日にソ連軍が国境を越えて侵攻を開始してから戦闘を停止した9月2日までの死者は約6万人で、その後帰国するまでの半年の間に18万人余りが亡くなったことになる。

多くの日本人が集まっていた大都市でいったい何が起こっていたのか。メディアはおろか、学問的な研究もほとんど行われてこなかった。この件について、海外引き揚げの問題に詳しい駒澤大学文学部の加藤聖文教授は、「集団自決や残留孤児などその悲劇性に目を奪われた結果である」と指摘している。

なぜ、大都市で多くの犠牲者が出たのか。そこでいったい何が起こっていたのか。

その疑問がドキュメンタリー「満州 難民感染都市」を製作する動機となったのである。

ところが、企画が採択されてインタビュー取材に取りかかった2020年早々、思いも寄らない事態に直面した。新型コロナウイルスの大流行である。日本中が感染の恐怖に包まれ、緊急事態宣言によって取材は中断に追い込まれた。

感染症は今回の番組で検証しようとした終戦直後の旧満洲でも大流行した。ソ連軍兵士による略奪や暴行に怯え恐怖が支配する街で、発疹チフスが蔓延し、病に倒れる人が相次いでいたのだ。都市に避難してきた人たちは食料もなく暖房もない収容所で次々に感染し命を失った。彼らと都市に住む日本人居留民、本来は助け合わなければならぬ日本人同士が対立し、溝を深める事態を招いたのである。それは本書のテーマであり、本文中で詳しく述べるが、支援の遅れが対立を招いたのである。

今回のコロナ禍によって、われわれは感染症の恐怖をまざまざと実感することになった。その体験を基に、80年前の満洲に身を置くとしたら果たして自分のできたのであろう

か。

救済の遅れは居留民からの寄付が集まらなかったことによるが、果たして居留民を責めることはできるだろうか。時空を超えて声高に責めても何の意味もない。その当時、日本人が置かれた状況を検証し、なぜ支援ができなかったのか、その理由を深く知ることが大事である。

居留民なり難民を非難するのではなく、その時代に身を置いて「当事者」として何ができるか、本書を通じて考えていただければ幸いである。

番組取材は新型コロナの第一波が下火になった2020年5月から6月、第2波が下火になった9月から10月と、感染流行の合間を縫って行い、年度末の2021年3月に放送することができた。

本書は、NHK-BS1スペシャル「満州 難民感染都市（前編）知られざる悲劇、（後編）祖国への脱出」（100分）を基に、番組では取り上げることができなかった出来事や、その後の取材によって判明した事実を加味して書き下ろしたものである。

2024年4月

矢島良彰

目次

はじめに……………1

プロローグ……………11

第一章 黒姫郷開拓団と取り残された人たち……………17

黒姫郷開拓団と父とのかかわり……………18

困難を極めた開拓民の募集と歴代の団長たち……………20

ソ連軍の侵攻と避難民を襲った悲劇……………24

犠牲者が拡大した三つの要因……………29

コラム 満蒙開拓団とはどういうものだったか……………31

第二章 ソ連軍の侵入と避難民の流入……………35

満洲最大の商工業都市・奉天……………36

ソ連軍の侵入……………38

避難してきた日本人たち……………45

居留民会の設立……………48

「難民化」することの怖さ……………53

ソ連軍の暴行と「婦人特攻隊」……………57

第三章

追い詰められる難民……………61

難民収容所……………62

開拓医療の拠点 満洲医科大学……………65

巡回診療班と救護所の設置……………70

届かぬ満洲からのSOS……………73

黒姫郷開拓団の窮状……………76

第四章

遅れた難民の救済……………81

救済の状況を知る手がかりの発見……………82

資金難がもたらした救済事業の遅れ……………84

居留民と難民の分断……………91

第五章 発疹チフスの蔓延と満洲医科大学の活躍……………99

発疹チフスの蔓延……………100

感染の脅威……………105

患者の隔離……………109

命がけのワクチン製造……………112

コラム 安部公房の父・安部浅吉の殉職……………115

第六章 子どもたちの行方……………119

居留民に広がる生活の困窮……………120

孤児収容所に預けられた子どもたち……………123

中国人に預けられた子どもたち……………126

ただ生きる、そのために……………132

第七章 動き出した救済活動……………137

資金工作……………138

難民の市内保護疎開……………140

第八章

待望の引き揚げ……………

159

座布団の「根こそぎ動員」がもたらしたものの…………… 141

北條秀一と協同組合運動とのかかわり…………… 143

威力を発揮したシラミ駆除器…………… 145

ペストの発生と防疫活動…………… 147

救済から生活の自立へ…………… 150

コラム 繰り返されたペストの大流行…………… 154

満洲をめぐる大国の野望…………… 160

国共内戦とアメリカの調停…………… 162

引き揚げの開始…………… 164

北條の逮捕…………… 166

コレラの流行…………… 168

二人の恋…………… 169

孤児中隊の帰還…………… 172

それぞれの帰国…………… 174

コラム 安部公房の引き揚げ…………… 178

第九章 取り残された人たち……………181

瀋陽に残った日本人……………182

激化する内戦……………183

中共軍に留用された人たち……………187

中国残留孤児……………188

エピソード……………193

それぞれの戦後……………193

●北條秀一……………193

●崎山ひろみ……………194

●三石忠勇……………196

●手塚元彦……………198

その後の満洲医科大学……………199

黒姫郷残留者の帰国……………200

注……………206

おわりに……………215

引用・参考文献……………222

本文写真出典・提供……………232

「満州 難民感染都市」放送記録……………236

プロローグ

満洲の冬は早い。10月を過ぎると朝夕の気温は氷点下になる。満洲最大の都市、奉天（瀋陽）の街路を、埃と汗でよれよれになった夏服のまま、背中にわずかばかりの食料を入れた「かます」を背負い、寒そうに縮こまって歩く男たちの一団があつた。1か月ほど前に北満の開拓地を脱出した「薬泉山黒姫郷開拓団」の一行である。一足先にたどり着いた婦女子組と合流するためであつた。

黒姫郷開拓団は終戦時48戸166人の小さな開拓団であつた。終戦後もソ連軍の監視下で、一団となって自給生活を営んでいたが、ソ連兵や現地住民によるたび重なる襲撃や略奪に耐えかねて、10月初めにいよいよ北満の開拓地を脱出することを決意した。

避難途中の北安で男たちはソ連軍に捕虜として軟禁され、橋や堤防の復旧工事に駆り出された。この間に残った女たちは子どもを守りながら、1か月余りかけて奉天にたどり着いたのだつた。男たちはなけなしの金を集めてソ連軍の指令官に賄賂を渡して釈放してもらい、女たちの後を追った。合流先は避難民収容所となつた富士青年学校だつた。

避難してきた人たちは收容所に案内され、疲労のあまりその場に倒れ込んだ。開拓地を出て以来、食事らしい食事をとることもなく、何日も歩き通してやつとのことでした。たどり着き、氣力を失っているかのようだった。收容所では夜具などの支給はなく、ワラで編んだ蓆むしろを布団代わりにして、身を横たえるしかなかった。2、3日してようやく起き上がると、食料を探しに出かけた。手当たり次第に食べられそうな物を拾っては、食料の足しにした。子どもの手を引いて、日本人居留民の住宅街をまわり物乞いをする女たちもいた。

黒姫郷開拓団の一行は、奉天の收容所にたどり着くまでの1か月の間に2人の乳幼児を病気で死なせたが、犠牲者はそれだけで、ほぼ無傷だった。悲劇に襲われたのは、このあとからだった。団員のひとりが日本に持ち帰った日記と詳細な消息を記録した団員名簿（簿）によれば、奉天に到着してから帰国するまでの間に、団員の6割以上の104人が亡くなった。死因の内訳は栄養失調40人、発疹チフス31人、肺炎27人、その他不明と記録されている。

なぜこれほどまでに犠牲者が出たのだろうか。

旧厚生省の統計によると、ソ連軍が組織的な戦闘を停止した昭和20（1945）年8月末から、翌年の引き揚げまでの間に、旧満洲では18万人もの日本の民間人が亡くなった。ソ連軍の侵攻によって命を落とした民間人は6万人余りなので、じつにその3倍もの人たちが、避難した先で犠牲になったことになる。多くは新京（長春）や奉天（瀋陽）などの大都市で倒れ、亡くなった。これまで満蒙開拓や残留孤児の番組製作などをおして、引き揚げについて取材を

してきた私にとって、この事實は驚きであり衝撃だった。新聞やテレビなどのメディアも大都市で起こっていた悲劇について、全貌を掘り下げて伝えることはほとんどなかった。

開拓団の側からの資料として、満蒙開拓と引き揚げの歴史を検証した『満洲開拓史』（満洲開拓史刊行会）や最大の開拓団を送り出した長野県の『長野県満洲開拓史』（長野県開拓自興会）が、都市居留民会の側からの資料として、ソ連軍の侵攻と引き揚げについて記録した『満蒙終戦史』（満蒙同胞援護会）や『満洲奉天日本人史』（奉天会）が刊行されている。いずれも貴重な歴史資料である。ただ惜しむらくは、ソ連軍侵攻から戦闘停止までについては詳細に記されているが、大都市に避難してから帰国するまでについては、簡略に記されているのみであった。この間の総合的な取材や検証、学術的研究はほとんど行われてこなかったのである。いわば検証の空白地帯といえる。

避難先の大都市で、なぜこれほど多くの犠牲者を出すことになったのだろうか。いったいこの空白の半年余りの間に、何があったのだろうか。このままでは証言者がいなくなり、忘れ去られてしまうのではないか。

こうした危機感から取材を進めるうちに、滋賀大学経済経営研究所が保存する『満洲引揚資料』のなかのある資料に行き当たった。『満洲引揚資料』は「満蒙同胞援護会」（現・国際善隣協会）が『満蒙終戦史』の編纂にあたって集めた膨大な資料を保存したものである。段ボール箱200個余り、全570項目に及ぶ資料がマイクロフィルムに収められて、閲覧できるよう

になつていた。

その膨大な資料を探っているうちに、わら半紙にガリ版刷りの黄ばんだ冊子に行き当たつた。当時、居留民会が配布した会報を綴じたもので、難民や救済関係者に向けて活動方針や事業について知らせる内容であつた。

タイトルは、『難民救済事業要覧』^(注)。第1から第3までの3冊と『衛生要覧』からなつていた。その冊子を一読して企画の手掛かりを得たと確信した。

『満洲引揚資料』のほとんどは、難民救済に携わつた関係者の手によつて、帰国してから記憶を頼りに書かれた資料である。不都合な事柄は省略され、貢献については強調される傾向があつた。対して『難民救済事業要覧』には、その時々々の課題と真剣に向き合う様子が記されている。救済の現場で配布されたまさに一次資料で、悲惨を極めた収容所の実態、発疹チフスの蔓延、救済にあつた当事者の献身的な活動など、難民や救済事業に携わつていた人たちの苦悩や意気込みを生々しく伝えていた。

第1号の冒頭で、救済処長の北條秀一が「難民諸君に告ぐ」と題して、救済活動の遅れを詫びている。

今こそ設備の不完全な所で向寒の折柄其の日其の日を送って頂くことは真実に申訳なく存じ深く御詫び申上げる次第であります。(中略) 今まで皆様を指導監督する責任もなく放置していましたが11月15日(中略)より毎日昼食には粗末ですが雑炊を差上げることと

なりました。又寒さが酷しくなりますので12月1日より採暖を開始致す積りで折角準備中
です。『難民救済事業要覧』1945年11月10日付け)

雑炊の配給が開始されたのが11月15日。終戦からすでに3か月が経過している。採暖が始まった12月は、日中でも氷点下となる極寒の季節である。満洲で比較的南に位置する瀋陽でも、11月に入ると気温は氷点下になる。支援の遅れは、難民にとって致命傷になったことだろう。いったい空白の3か月に何があったのだろうか。

祖国日本から見放され、孤立した都市のなかで、暴力と感染症の恐怖にさらされていたのは、開拓地から逃れてきた開拓民だけでなく、都市に住んでいた日本人居留民も同じことである。都市に流入してきた開拓民たちとそれを迎えた居留民はどのようにして生き延びようとしたのか。そして両者の間には何が起こっていたのか。

黒姫郷が持ち帰った日記と団員名簿、『難民救済事業要覧』を手掛かりにして、明らかにされていない引き揚げ途上の大都市での真実に迫ることができるのではないだろうか。

こうして、私たちは満洲国時代の奉天（現在の瀋陽）を舞台にしたドキュメンタリー番組「満州 難民感染都市」（放送…2021年3月28日NHK・BS1）の製作に取り組むことになったのである。

発疹チフスの蔓延

ようやく収容所での雑炊の炊き出しと暖房の開始に踏み切った居留民会は、まず主要な4か所の収容所を救護所と名称を改め（本書では混乱をさけるため、以後も「収容所」と記す）、冬に向けてより積極的な支援に取り組んだ。終戦から3か月が過ぎて難民も生気を取り戻したかに見えた。ところが、朝夕の気温が氷点下になるなか、高熱を出して命を落とす難民が増加の一途をたどった。発疹チフスの感染拡大である。

10月28日、瀋陽で発疹チフスが最初に報告されたのは、黒姫郷開拓団が収容されていた富士青年学校の収容所であった。入浴もままならない収容所の不衛生な環境が病原体を媒介するシラミの大発生を引き起こした。

当初「敗戦病」と呼ばれていたその病気が発疹チフスであることが判明したときには、すでに収容所内で蔓延していた。不衛生な収容所で氷点下の寒さに身体を寄せて互いの体を温め合って寝ていたことから、感染は瞬く間に広がった。

発疹チフスは、リケッチアという病原体をシラミが媒介して広がる感染症で、感染すると1、2週間で発症、39度以上の高熱に見舞われて重症化する。第一次世界大戦中のヨーロッパで猛威をふるって数百万人の死者を出した。

瀋陽で発疹チフスが拡大した頃、富士青年学校に収容されている人たちは3000人への



三井寛さん（前列左）と両親



三井寛さん近影

ぼっていた。黒台信濃村開拓団の三井寛さん（当時13歳）もこの収容所にいた。「発疹チフスで亡くなったっていうのは、後の人が言うことであって、その当時は何で死んだかわからない。とにかく具合が悪くて寝込む。寝込めばそれで終わり。だから発疹チフス、発疹チフスって言うけれども、医者が診断した人はひとりもない、それが現実だったのです」

平安郷開拓団の三木初代さんも同じ富士青年学校の収容所にいた。

「シラミが髪の毛に巣くったらもう切るしかない。ハサミを持っていたから、それで髪を切って丸坊主にして、ダーとシラミを落として、悲惨でしたね。いまだに夢に出てきません」

父母と兄弟の6人で収容所にたどり着いた敦化神戸開拓団の渡辺是仁さんの家族も発疹チフスに感染した。

「シラミは旺盛なんです、生きる力が。衣服の縫い目や衿などにしがみついているシラミをむいてはパチ、むいてはパチって爪が真っ赤になるほど潰しても退治できない。すると2、3日で成長する。成長すると衣服の縫い目などに卵を生みつける。これがまた成長して、執拗に血を吸い取る。ただでさえ栄養失調気味の体から容赦なく血を吸い取っていく。痒くてたまらなかった。大抵の人は、一度は発疹チフスに感染した。家族で一番軽かったのは私です。母は死にそうになって遺言までして。そのときは一番辛かったですね」

何とか発疹チフスの蔓延を食い止めようとしたのは満洲医大だった。瀋陽市内の開業医の協力を得て、医師1人に学生と看護婦数人からなる救護班を編成して、毎日のように収容所の巡

回診療に当たった。

救護班員は、シラミ予防のため足先から首下まですっぽり入る白衣をつけ、手首を縛り顔面だけ外に出る予防衣を着用し、長靴を履いて診療にあたった。それでもシラミは衣服の中に侵入して、寮に戻ると身に付けていた下着を煮沸消毒しなければならなかった。

発疹チフスの治療薬がまだ開発されていないなか、治療は完全にお手上げの状態であった。学生たちは教室にあった薬を手当たり次第に持って行き、せいぜい対症療法を施すだけだった。発疹チフスだとわかっているにもかかわらず、隔離もできない。予防ワクチンもない。発疹チフスの威力はすさまじいものであった。

当時、満洲医大の1年生だった島津義臣さんも巡回診療に加わった一人であった。

「発疹チフスは戦争チフスの別名を持つ伝染病のひとつで伝染力が強く、たちまち市内に拡大しました。満洲医大の職員はもちろん我々学生にまで動員令が下り、予防や治療やらでなくてこ舞でした。ほとんど薬らしいものもなく、関東軍の残留薬を配布したり、注射といってもビタミン剤ぐらいしか打てませんでした」

続々と死者が出た。ことに栄養状態の悪い収容所の人々は惨憺たるものだった。

「自分が瀕死の状態になっているのに空腹で泣く我が子に乳を飲ませようとする母親。翌日行くとすでにその母親は動かなくなっており、赤ん坊は知らずにその乳房を必死に吸い

求めている。当時何もできなくて悔しい思いをしたのを覚えてます」

島津さんは今でもその光景を思い出すと涙が出ると語ってくれた。

死者が続出し、学校の広い運動場は墓標の山となった。

難民たちの衣類は塩を撒き散らしたようにシラミで真っ白になった。シラミを1匹ずつ取るどころか、手のひらで掻き集めなければならぬほどである。頭髮のなかにもシラミが密集していた。尋常な量ではないシラミを取り除くのは容易ではなかった。諦めて放置するよりほかない状態だった。

発疹チフスは症状が進むと意識が朦朧となって、夜眠っているときに、あらぬうわごとをいうようになる。周りの者もいらついで、同じ部屋にいる者の人間関係がおかしくなってしまうことがいくらかも起こったという。症状の程度は人によって違うが、医師も看護婦もいなければ、薬もないなか個人の自然治癒力に頼るしかなかった。同じ収容所内で発疹チフスと寒さで多くの人が亡くなった。

満洲医大2年生で救護班の一員として巡回救護に当たった島田弘はそのときの体験を、同窓会誌にこう記している。

当然、伝染の危険は皆覚悟していた。(中略) まだ、臨床経験のない私は熱のあるときは解熱剤の注射、腹痛のときは鎮痛剤の注射(中略)、そして聴診器を必ず使用すること